



SYNTHESIS 2021

シンセシス

The Annual Report of the MGU Institute for Liberal Arts

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報 2021



INDEX

01	研究所概要	01
02	月例研究報告	07
03	ランゲージラウンジ活動報告	13
04	語学検定講座報告	19
05	研究プロジェクト	27
06	研究業績	35

01

研 究 所 概 要

01

2021年度教養教育センター付属研究所概要

I. 組織

◆研究所運営委員会執行部

所長：嶋田彩司

主任：吉岡拓 三角明子

研究部門運営委員：西香織 篠崎美生子

◆研究所所員

李善姬 池田昭光 石井友子 猪瀬浩平 植木献 上野寛子 塩谷祐人 大森洋子 亀ヶ谷純一
金珍娥 黒川貞生 小泉ユサ 篠崎美生子 嶋田彩司 杉崎範英 鈴木陽子 徐正敏 高木久夫
高桑光徳 田中祐介 張宏波 鄭栄桓 土屋陽祐 徳間晴美 中野綾子 永野茂洋 名須川学
西香織 野副朋子 長谷部美佳 福山勝也 三角明子 森田恭光 山内薫 吉岡拓 渡辺祐子
Constantinescu Cezar Elam Jesse MacLellan Dawn Thomas Dax 吉田真 洪潔清
諏訪間恵美 榎本翔太 中谷深友紀

◆研究員

安部淳 池上康夫 石渡周二 伊藤瑳良 可部州彦 黒田正明 鈴木義久 武光誠 原田勝広
松山健作

II. 研究活動

1. 研究プロジェクト（*＝代表者）

①ひとびとの歴史を表現する：首都圏開発と市民活動の現代史的探究

*猪瀬浩平、長谷部美佳、植木献、可部州彦、荻村哲朗

②神山町旧村役場文書から見た人の移動に関する研究

*吉岡拓、鄭栄桓

③林京子と上海 ―共生／加害の記憶―

*篠崎美生子、洪潔清、渡辺祐子

④筋と腱における「硬さ」の評価～超音波剪断波エラストグラフィを用いた測定とその妥当性～

*黒川貞生、榎本翔太、亀ヶ谷純一、中谷深友紀、土屋陽祐、伊藤瑳良

⑤Extensive Reading vs. Audio-Assisted Extensive Reading: A Comparison of Performance and Motivation

*Dax Thomas

2. 研究報告会

日付	報告者（敬称略）	テーマ
第1回（7/7）	安部 淳	ほとんどオスを産まないハチの謎から見えてきた協力の進化

Ⅲ. 教育活動

《学内語学試験》

※昨年度に続き、コロナ禍により通常試験受験に制限があり、要望が多かったためオンライン受験の機会を提供

TOEIC IP試験	校舎	日付	受験者数
〈第1回〉	オンライン	9/10（金）～9/17（金） ※この間に1度のみ受験可	182名
〈第2回〉	オンライン	10/15（金）～10/22（金） ※この間に1度のみ受験可	149名
〈第3回〉	オンライン	12/7（火）～12/14（火） ※この間に1度のみ受験可	110名
〈第4回〉	オンライン	2/21（月）～3/3（木） ※この間に1度のみ受験可	111名
TOEFL ITP試験→今年度の開催なし			

《講座》

◆短期講座・通年講座◆

スペイン語DELE・SIELE 試験準備講座					ドイツ語技能検 定試験対策講座		TOPIK韓国語能力試験対策講座						中国語資格試験 対策講座	
					3級	4級	TOPIK I -1級		TOPIK I -2級		TOPIK II		中検4級・ HSK3級	
学期	春学期	秋学期	夏季集中	春季集中	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期
実施期間	5/12～ 6/30	10/6～ 12/1	9/6～ 9/10	2/28～ 3/4	4/28～ 6/23	10/6～ 12/1	5/10～ 6/28	9/27～ 11/29	5/13～ 7/1	9/30～ 11/25	5/10～ 6/28	9/27～ 11/29	5/7～ 6/25	10/1～ 11/19
校舎	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン
教室 ★は オンデ マンド 併用開講	Zoom / manaba		Zoom	Zoom	Zoom / manaba ★	★	Zoom / manaba		Zoom / manaba		Zoom / manaba		Zoom / manaba ★	★
曜日時限	水曜 4限	水曜 4限	初級 10：00 ～13：00 中級 14：00 ～17：00		水曜 5限	水曜 5限	月曜 4限	月曜 4限	木曜 5限	木曜 5限	月曜 4限	月曜 4限	金曜 4限	金曜 4限
回数	各全8回		各10コマ (2コマ×5日)		各全8回		各全8回							
講師 (敬称略)	Luis Rabasco		初級 仲道 慎治 中級 Eugenio del Prado		佐藤 修司		秋 賢淑 (チョ・ヒョンスク)		金 南听 (キム・ナムン)		崔 靜仁 (チェ ジョンイン)		鈴木 健太郎	
募集人数	各25名程度		各20名程度		各10名程度		各20名程度							
エントリ 者数	春： 5 名 秋： 7 名		初級 4 名 中級 5 名	初級 11 名 中級 6 名	春： 5 名	秋： 6 名	春： 9 名 秋： 9 名		春： 12 名 秋： 8 名		春： 15 名 秋： 16 名		春： 9 名 秋： 16 名	
2021年度 毎月 出席者 数* (名)	5月 2・3・3 6月 1・2・2・2・2		初級 4・2・4・ 4・2 中級 4・4・4・ 3・3		4月 3(5) 5月 3・2・2 6月 1・2・ 1・1		5月 8・4・4・4 6月 3・3・3・3		5月 10・7・5 6月 5・4・3・3 7月 3		5月 8・7・3・5 6月 3・2・3・3		5月 7・6(8)・7(8)・7 6月 7・6・6・5	
	10月 6・6・5・3 11月 3・2・2 12月 2			初級 8・8・7・ 6・6 中級 4・3・3・ 3・0		10月 3・2・ 2・1 11月 2・2・3 12月 2	9月 4 10月 2・0・0(1) 11月 0・0(3)・0(1)・0		9月 5 10月 2・1・1・0 11月 1・1・1		9月 13 10月 10・7・6 11月 4・2・3・2		10月 11(12)・12(14)・ 11(12)・8(10)・ 4(7) 11月 7(9)・5・3	

*manabaコンテンツ閲覧数、小テストの学習状況、オンデマンド教材閲覧数等を含む

中国語資格試験対策講座				実用フランス語技能検定 試験対策講座				日本語能力試験（JLPT） 対策講座			日本語教育 入門講座		手話 特別講座	キャン プ インストラ クター 資格講座
中検3級・ HSK4級		中検4級・ HSK3級		仏検3級		仏検4級		JLPT N1		JLPT N2				
春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	春学期	秋学期	春季集中	秋学期
5/7～ 6/25	10/1～ 11/19	5/11～ 6/29	10/5～ 11/30	5/14～ 6/25	10/15～ 11/26	5/17～ 6/21	10/11～ 11/22	5/13～ 7/1	10/15～ 12/3	5/11～ 6/29	5/12～ 7/14	10/6～ 12/1	3/7～ 3/11	12/22
オンライン Zoom / manaba ★	オンライン ★	オンライン Zoom / manaba ★	オンライン ★	オンライン Zoom / manaba	オンライン	オンライン Zoom / manaba	オンライン	オンライン Zoom / manaba	オンライン	オンライン Zoom / manaba	オンライン Zoom / manaba	オンライン	白金 1253	横浜 体育館
金曜 2限	金曜 2限	火曜 2限	火曜 2限	金曜 5限	金曜 5限	月曜 5限	月曜 5限	木曜 5限	金曜 3限	火曜 4限	水曜 2限	水曜 3限	3～4限	1限
各全8回				各全7回		各全6回		各全8回			各全10回		全10回	全1回
鈴木 健太郎		李 麗君		檜垣 嗣子		加藤 美季子		込宮 麻紀子	佐藤 明子	渡辺 昇	野口 直子	梶川 明子	荒木 泉 （ゲスト講師） 長田 静乃	塚脇 誠
各10名程度				各15名程度		各20名程度		各20名程度			各20名程度		30名程度	
春：4名 秋：9名		春：7名 秋：8名		春：8名 秋：8名		春：14名 秋：8名		春：13名 秋：6名		春：2名	春：13名 秋：16名		36名	2名
5月 2(3)・2(4)・ 1(2)・3 6月 1・1(3)・1・1		5月 3(3)・2(4)・ 3(2) 6月 3(2)・3(1)・ 3(1)・3(0)・ 2(1)		5月 6・6・7 6月 4・4・5・4		5月 14・11・9 6月 2・3・1		5月 8・10・7 6月 6・7・6・5 7月 5		5月 1・1・1 6月 1・1・1 ・1・1		5月 8・8・7 6月 7・休講・4・4・2 7月 3・3		2名
10月 6(6)・0(5)・ 7(8)・6・4(5) 11月 4(5)・3・3		10月 7(0)・5(2)・ 2(4)・3(2) 11月 2(1)・3(1)・ 2(1)・1(2)		10月 6・7・6 11月 7・7・7・4		10月 3・2・2 11月 0・1・0		10月 3・2・1 11月 2・1・2・1 12月 1		10月 11・13・12・11 11月 9・7・6 12月 4 ※2週目から1名追加		17・17・ 16・15・ 16		

◆TOEIC講座◆

講座名	校地	時間	期間	講師(敬称略)	申込数	受講者数
〈試験対策講座〉 春学期	今年度の開講なし					
〈試験対策講座〉 秋学期						
〈夏季集中特訓講座〉 基礎コース	オンライン	9:15～ 12:25	8/23～8/27 (5日間)	中村道生	14名	11～14名
〈夏季集中特訓講座〉 実践コース	オンライン	9:15～ 12:25	8/30～9/3 (5日間)	中村道生	24名	15～22名
〈春季集中特訓講座〉 基礎コース	オンライン	9:15～ 12:25	2/14～2/18 (5日間)	中村道生	11名	7～10名
〈春季集中特訓講座〉 実践コース	オンライン	9:15～ 12:25	2/24～3/2 (土日祝日を除く5日間)	中村道生	15名	9～14名

IV. その他

《公開講演会》

- ・新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、今年度は公開講演会の開催を自粛した。

《刊行物》

- ・明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報『SYNTHESIS 2021』3月発行

02

月例研究報告

02

ほとんどオスを産まないハチの 謎から見えてきた協力の進化

安部 淳

私はメリトビアという小さなハチの仲間のオスとメスの割合（性比）の進化について研究を続けている。近頃、研究に進展があり、その成果を共著者らと共に「A solution to a sex ratio puzzle in *Melittobia wasps*（寄生バチメリトビアが示す性比の謎への解答）」というタイトルで、PNAS（米国科学アカデミー紀要）に発表した（Abe et al. 2021）。明治学院大学の広報からもプレスリリース（https://www.meijigakuin.ac.jp/corporations/release/PDF/MG_210511.pdf）を配信していただき、新聞やインターネット上の記事など各種メディアにも取り上げていただいた。2021年7月7日の教養教育センター附属研研究報告会では、論文のサマリーを紹介させていただいた。本稿では、その概要を振り返るとともに、特に発見の意義についてまとめてみたい。

今回の発見のポイントは、異なる視点から捉えることにより3つに大別することができる。まずは、具体的な現象として、(1) これまで謎とされてきたメリトビアというハチがほとんどオスを産まない理由を明らかにすることができた。次に、その成果は特定のハチの行動の理解に留まらず、(2) 母親どうしが血縁関係によって性比を調節することの発見につながり、性比調節の分野の発展へ貢献した。さらに、そこで確認されたオスを少なく産むという行動は、(3) 母親どうしの協力行動と解釈でき、社会行動全般への理解に応用することができる。ここではこれら3つのポイントについて、順に紹介していく。



図1. メリトビア (*Melittobia australica*) のオス（右側の茶色い個体）とメス（左側の黒い個体）の成虫。寄生バチの仲間では他のハチ類の蛹に寄生する。オスの成虫は羽化後分散することなく、その場で交尾だけに専念する。1匹の蛹に単独もしくは複数の母親が産卵するが、それらの母親の子供どうしで交尾を行うことになる。

(1) メリトビアがほとんどオスを産まない謎の解明

メリトビアは体長1mm程度の小さなハチであり、他の昆虫に寄生する寄生バチと呼ばれる仲間的一种である（図1）。メリトビアのメスは、他のハチ（ハキリバチやドロバチなど）の仲間の蛹に産卵し、孵化した幼虫は産み付けられた蛹から栄養を摂取して成長する。このハチでは圧倒的にオスの割合が少なく（オス率1-3%程度）、このような性比が進化した理由は既存理論では説明できないことから、進化生物学や性比調節の分野における謎とされてきた。

メリトビアのオスは複眼を持たず、翅が小さくて飛ぶことができない。オスは羽化すると一緒に蛹から育ったメスたちと交尾を繰り返して一生を終える。一方、メスはそこで交尾すると精子を体

内に蓄え、新たに寄生できる蛹を求めて分散する。一緒に育った雌雄が配偶する生物では、後述するようにメスの割合が勝ることが知られているが、そのような生物でも性比がメスに偏るのは状況依存的で、メリトビアのように常にほとんどメスばかりを産む性比は理論的に説明することができない。これまで様々な仮説が提唱され検討されてきたが、その理由は十分に説明されてこなかった (Matthews et al. 2009; West 2009; Abe et al. 2014)。

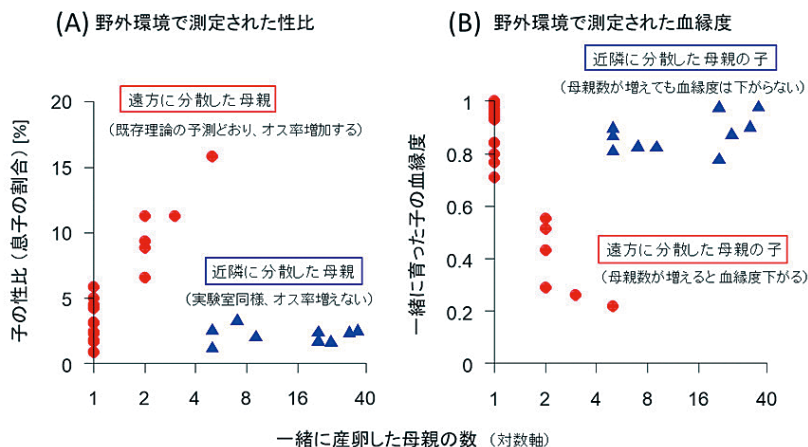


図 2. 野外環境で測定されたメリトビアの性比 (A) と血縁度 (B). 血縁度は個体間の血縁の濃さの指標であり、血縁関係が弱いほど 0 に近づき、強いほど 1 に近づく。一緒に産卵する母親数が増えれば、そこで育つ子との血縁度はふつう減少すると考えられる。近隣に分散した母親の子の間で血縁度が高く維持されているのは、血縁度の高い近親の母親どうしが一緒に産卵したためと考えられる。Abe et al. (2021) から改訂、安部 (2021) から転用。

私はこれまでに報告されてきたメリトビアの性比はすべて実験室内で測定されていることに着目し、この性比が実際に進化したはずの野外環境において調査を行った。9 年間に渡り野外調査を継続してデータを蓄積したところ、実験室と同様に常にほとんどメスばかりを産む場合も確認されたが、他の寄生バチや既存理論の予測どおりオス率を上げて産む場合もあることが新たに示された (図 2 A)。次に、遺伝マーカーを開発し DNA 解析によって、これら 2 つの性比パターンとそこで産卵した母親どうしの血縁関係を明らかにすることを可能にした。その結果、母親が近隣の蛹に分散した場合は、血縁関係の濃いメスどうしと一緒に産卵し、常にほとんどメスばかりを産んでいたのに対し、遠方の蛹に分散した場合は、血縁関係のない赤の他人と一緒に産卵し、オス率を高めて産んでいることがわかった (図 2 A と B)。さらに、数理モデルを作成し、母親の分散様式に伴う血縁関係を考慮して理論的な解析を行ったところ、野外環境で観察された 2 つの性比パターンと定性的によく合う結果が得られた。以上の結果から、メリトビアでは母親の分散様式に応じた血縁関係によって性比を調節し、近隣の蛹に分散した場合は血縁関係のある母親と一緒に産卵するため、血縁のあ

る息子どうしがメスをめぐって競争するのを避けるため、オスの割合を少なく産んでいると解釈された（図3）。

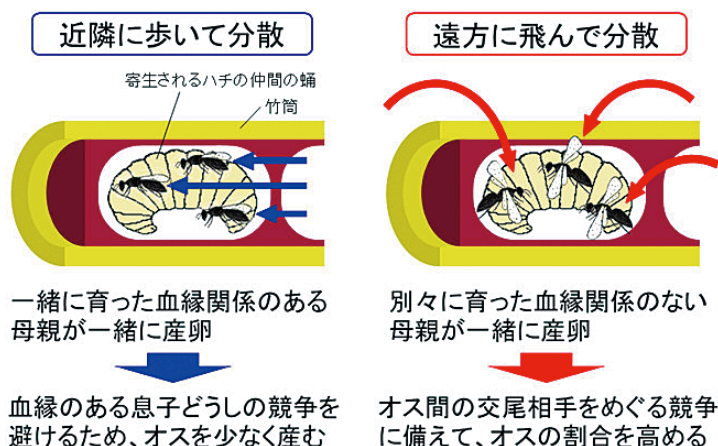


図3. メリトビアの分散様式の違いによる母親どうしの血縁関係と性比に関する概略図。寄生されるハキリバチやドロバチは、竹筒などの間に巣を作り、その蛹は連続して存在する。そのため、メリトビアのメスは歩いて同じ巣の中の別の蛹を探すか、飛翔して別の巣の蛹を探すかのいずれかの方法によって分散する。安部（2021）から転用。

（2） 親どうしの血縁関係に応じた性比調節の発見

多くの生物ではオスとメスが同じ割合で存在するが、性比がどちらかの性に偏る生物も少なくない。それらの性比はそれぞれの生物が置かれた状況に応じて、産卵する母親にとって最も効果良く子孫を残せる値に進化していることがこれまでの研究で明らかにされてきた。例えば、一緒に育った雌雄が配偶する生物では、一緒に繁殖する母親の数に応じて性比がメスに偏る場合がある（Hamilton 1967）。単独もしくは少数の母親と一緒に繁殖する場合、自身の息子どうしが配偶相手をめぐって競争することになるため、母親にとって無駄な競争を避けるようオスを少なく産むと考えられる。実際に、そのような生物ではメスに偏った性比を示すことが多くの生物で報告されている。しかし、一緒に育った雌雄が配偶する生物でも、複数の母親と一緒に繁殖する場合は、息子どうしが競争する頻度が下がるため、性比は1:1に近づく。寄生バチの仲間は特殊な性決定機構を持つため、産卵時に性を調節して産むことが可能である。この理論に従うように、一緒に産卵する母親数に応じて性比を調節し、母親数の増加に伴いオス率を上げて産卵することが多くの寄生バチで示されている。

このため、メリトビアで報告されてきた母親数に寄らず一定して極端にメスに偏った性比は、この分野における大きな問題であった。今回私たちは野外環境における性比と母親の分散様式との関係を解析することにより、メリトビアの性比は母親の数だけでなく、母親間の血縁関係によっても

調節されていることを世界で初めて明らかにするに至った。自身の息子の競争を避けるだけでなく、血縁のある息子どうしが競争する状況では、そのような競争も避けていたのである。性比を偏らせる要因を新たに示し、その顕著な具体例を提示することにより、性比調節の分野に新たな一石を投じる結果となった。

(3) 社会行動全般への応用

性比調節の問題は、協力や利己的な行動の調節がどのようになされるのかを明らかにする社会行動一般の問題としてとらえることができる。実際に子孫を生産するのはメスであり、オスは複数のメスを授精させることができるので、メスの割合が高い集団ほど集団全体の生産性は高まる。しかし、メスが多い集団では、オスを多く産む母親のほうが多くの子孫を残せるため有利となる。このため、集団全体の生産性を最大化するメスに偏った性比はふつう進化せず、それぞれの個体にとって有利となる方向に進化が進み、性比は多くの場合で1:1に近づく。ここで、メスに偏った性比はお互いの利得を上げるので協力的、それよりオスを多く産むことは個々の利得を上げるので利己的ととらえることができる。ちなみに、このように個人がそれぞれ利益を追うため集団全体の利益が達成されない状況は、経済学や社会学では「囚人のジレンマ」や「共有地の悲劇」と呼ばれよく研究されている。

このような視点で見ると、メリトビアでは他の母親と一緒に産卵する状況においても、お互いの生産性を高めるようにメスを多く産むため興味深い。このような産み方は、母親どうしに血縁関係がある場合になされることが今回示され、共通の遺伝子を共有する血縁個体どうしの協力的行動と解釈することができた。今回はこのような協力的行動が、母親自身が経験した分散様式の違いによって顕著に切り替えられることも示した。協力的行動などの社会行動の理解は、ハチの行動や性比調節の問題に留まらず、人間社会においても重要であり、明治学院大学が掲げる「Do For Others」の精神にも通じるテーマでもある。メリトビアの性比調節の理解は今回大きく進展したが、母親の分散様式の具体的な認識メカニズムや、このような協力的な雌雄の産み分けを可能にした前提条件の解明など、明らかにすべき残された課題も多い。今後、それらを解明していくと同時に、そこから得られた理解を社会行動全般の理解へと応用させて研究を発展させていきたい。

【引用文献】

- Abe, J., Iritani, R., Tsuchida, K., Kamimura, Y. & West, S. A. "A solution to a sex ratio puzzle in *Melittobia* wasps" *Proceedings of the National Academy of Science, USA* 118, (2021) e2024656118.
- Abe, J., Kamimura, Y. & West, S. A. "Inexplicably female-biased sex ratios in *Melittobia* wasps" *Evolution* 68, (2014) 2709-2717.

Hamilton, W. D. "Extraordinary Sex Ratios" *Science* 156, (1967) 477–488.

Matthews, R. W., González, J. M., Matthews, J. R. & Deyrup, L. D. "Biology of the parasitoid *Melittobia* (Hymenoptera: Eulophidae)" *Annual Review of Entomology* 54, (2009) 251–266.

West, S. A. *Sex Allocation*. Princeton University Press (2009).

安部 淳. "寄生バチの仲間が母親どうしの血縁関係によって息子と娘の割合を調節してうむことを発見" 神奈川大学理学部ホームページ 研究レポート (https://www.sci.kanagawa-u.ac.jp/news/img/document/news_pdf20210520.pdf) (2021)

03

ランゲージラウンジ
活動報告

03

2021年度ランゲージラウンジ活動報告

教養教育センター ランゲージラウンジ運営委員会

1. 総括

2008年に始まったランゲージラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて学生たちが自律的に学習できる環境をつくることから始まった。現在は、英語とスペイン語においてILSSP (Independent Language Study Support Program) を開設し、学習者自らが具体的な目標を設定して、その目標に向かって定期的にチューターと面談しながら（英語）、あるいは、オンライン学習ツールを用いて（スペイン語）、自律学習ができるような支援を行っている。

これらの活動に加え、言語（ドイツ語、スペイン語、中国語、韓国語、フランス語）ごとに曜日・時限を決めて、ランゲージラウンジにて母語話者との会話実践の場を提供したり、日頃の学生の外国語学習のサポートを行ったりしている。

今年（2021）度も昨年（2020）度に引き続き、新型コロナウイルスの流行により、緊急事態宣言が出るなどしたため、外国語の授業はほぼすべてがオンライン（同時双方向型）で行われた。そのため、ランゲージラウンジもほぼ全面的にオンラインによる実施となったが、活動に携わる教員にとっても語学教育のあり方を見直す良い機会となったように思われる。

次年度についても、対面かオンラインかを問わず、引き続き母語話者との交流の機会を増やし、言語がコミュニケーションの道具であることを実感できるような場を増やすことを目標に、多様な外国語学習の支援活動を行っていきたい。

2. 活動詳細

2.1 英語部門：鈴木陽子

英語部門では、昨年度に引き続き、二種類の自律学習支援プログラムを実施した。一つは、一学期間にわたって自律学習を支援するIndependent Language Study Support Program (ILSSP)、もう一つは、一回のセッションから参加可能なEnglish Clinicである。今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、二つのプログラムは春・秋学期共にWeb会議ツール（Zoom）を用いてオンラインにて実施した。

ILSSPは、本学非常勤講師の山森由美子氏および坂井誠氏を担当者とし、月曜日（11:00-15:30）と水曜日（11:00-15:30）に実施した。担当者は各学生が設定した目標に沿って教材や学習方法を提案し、ポートフォリオ（学習記録）を活用して、自律的に学習計画や目標が立てられるよう助言を行った。今年度は春・秋学期共に受け入れ可能な人数を大きく超える申し込みがあったが、個別指導という性質から、希望する学生全員にプログラムを提供することは叶わなかった。そのため、参加申込書に記入された英語学習の目標を勘案して選抜を行った。各学期の参加者数の詳細は表1の通りである。

表1 ILSSPの実績

	LE	LF	LA	EE	EB	EG	SG	SW	JU	JC	JP	JG	KS	KC	PS	PE	計
春	2	0	2	2	0	1	2	1	0	1	0	1	3	1	3	1	20
秋	3	0	1	1	1	2	0	0	0	1	3	1	3	0	3	1	20

English Clinicは、ILSSPに参加することができなかった学生や英語学習に関するさまざまな質問や悩みを抱える学生に向けたプログラムである。本学非常勤講師のTom Webb氏および田辺玲子氏を担当者とし、春・秋学期共に火曜日と金曜日の昼休みに実施した。各学生が抱える相談内容に応じて、文法や語彙、発音に関する質問に答え、英語の学習方法や留学関係書類の作成について助言を行った。また、英語でアウトプットする機会を求める学生に向けて、英会話やプレゼンテーションの練習ができる機会を提供した。今年度（12月末時点）のセッションの提供数と実施数は表2の通りである。

表2 English Clinicの実績

	春学期	秋学期	全体
提供数	56	50	106
実施数	32	37	69
実施率	57.1	74.0	65.1

オンラインでの実施となったことで、キャンパスを問わずプログラムに参加することが可能になり、横浜キャンパスで実施していた時よりも3、4年生の参加者が増えたことが特徴的であった。来年度以降もプログラムの周知に力を入れ、多くの学生に利用してもらえることを期待したい。

2.2 ドイツ語部門：コンスタンティネスク チェザル

2021年度ランゲージ・ラウンジ（ドイツ語）は『ドイツ語deランチ』と題し、森本康裕氏（本学非常勤講師）が担当した。コロナの影響のため対面形式ではなく、manabaとZoomを併用した遠隔形式で行われた。開催日時は春・秋両学期を通じて毎週月曜と金曜の週二回ずつ、それぞれ昼休みの30分間（13：00～13：30）の実施となった。

月曜日はオンデマンド型の形式で、担当者がテキストファイルによってドイツ語やドイツ語圏の文化・社会的な問題について紹介・解説し、一方で金曜日はZoomによるリアルタイム型（双方向型）で行われ、参加者とともにさまざまなトピックについて議論が交わされた。参加者は平均して3名程度で、主にドイツ語初級を履修する1年生および中級を履修する2年生の学生だったが、ドイツ留学経験のある3年生以上の学生や、時にはドイツ語未履修者が参加することもあった。講座の教材としては、主にインターネットで利用可能なサイト（“YouTube”や“Yahoo Deutschland”、あ

るいはその他のドイツ語圏のニュースサイト)、あるいは日本語に翻訳されたドイツ語学習資料や映像作品を利用し、ドイツ語リスニングや基礎文法項目の解説、重要なフレーズや単語の確認、すでに必修授業で学んだ文法事項の復習、典型的なドイツ語の言い回しなどの学習とともに、現代のドイツの時事的な問題について参加者間で意見交換を行った。

2.3 スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、昨年に引き続きオンラインコースを行なうとともに、Francisco GARZÓN先生を講師に、Tertuliaと名付けて、会話実践の時間も設定した。

自律的な学習をより効果的に行えるオンラインコース、セルバンテス文化センターが開設しているAVEglobalは、今年度も利用した。

オンラインコース：今まではそれぞれがDELE受験や将来の留学、さらには一定期間の現地での語学研修を経て、そこで得たスキルの維持等を考えての申し込みが目立っていたが、留学の実現の可能性が見えてこない現状では、応募者の減少が目立った。学習期間は長くなった一方で、定期的なチェックをしないと学生が自律的に学習できているかが把握できないこと、また時に学習を促したとしても、一方的な呼びかけであるためなかなか実情を掴めない点であり、さらに工夫が必要である。

一方、会話スペースは、今年度も昼休みが短縮されて、35分程度のセッションが続いた。今年度の特徴としては、具体的な目標をもった学生の参加が多かったが、そのような学生が減少しているためか、またオンラインでの広報にとどまっているからか、参加者が少なくなったようである。しかしながら、時機にあったスペインのテーマを取り上げて、映像等を使ってスペインについての情報を共有することで、スペイン語圏への興味をかき立て、学習のモチベーションアップにはつながったと言える。次年度については、より学生が参加しやすい方法を考えて、より活発なスペースになるように努力を続けたい。

2.4 中国語部門：洪潔清

2021年度中国語部門「中文会話倶楽部」の活動は、昨年度に続きオンライン（teams）での開催となった。今年度は非常勤講師に依頼し、通年毎週木曜日の昼休みに（30分～60分）実施した。春学期は、参加者数は数名程度ではあるが、毎回参加者がいた。参加者が初級レベル（学習歴半年以内）である場合は、それぞれの要求に応じて、中国語の発音チェックや、簡単な会話練習、質問応答などを行った。参加者が中級以上のレベルである場合は、旅行や故郷、好きなアイドル、自分の研究テーマなどについて、発表や議論を行った。このように、一学期の練習を通して、聞く力と話す力を大いに伸ばした学生からは好評であった。

秋学期は、一部の授業が対面形式に切り替えたため、2限と3限に授業を持つ学生はオンライン

による倶楽部活動の参加が難しくなった。そのため、秋学期の前半では、スピーチコンテストに参加するための発音チェックや留学出願書の中国語文章の修正といった具体的な目的を持つ学生が参加してくれたが、後半に入ると、参加者が一転して減り、一人もいない状況が何週間も続いていた。来年度は大学の授業が対面形式に戻る可能性を考慮に入れて、学生の要求に柔軟に応じながら、倶楽部の開催形式と開催時間の設定を工夫する必要があるように考えます。

2.5 韓国語部門：李善姬

2021年度韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミンA（初級）」、「韓国語ビタミンB（中上級）」は、オンライン同時双方向型(Zoom)の形態で実施された。

各講座の実施状況は次のとおりである。

1) 韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミンA（初級）」

高槿旭先生により毎週水曜日（12:55～13:25）実施された。参加人数は、春学期は5～19人、秋学期は2～9人が参加した。

2) 韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミンB（中上級）」

崔靜仁先生により毎週木曜日（12:55～13:25）実施された。参加人数は、春学期は1～16人、秋学期は3～10人が参加した。

●学習内容

学校生活、食事、買い物、映画、音楽など身近なテーマを中心に、気軽に自由な雰囲気、より自然な韓国語表現を身につけるようにした。テーマは、manabaで事前に知らせ、学生が前もって準備し、参加するようにした。

また、韓国の文化や習慣などを紹介し、日本と韓国の違いについて語り合った。

そして、オンライン授業の特徴を生かし、映像や写真などの資料をみせることで、学生の興味や理解を一層深めるようにした。

●学生の反応と成果

manabaで会話のテーマを前もって知らせることで、予習してくる学習者も多く、効率的に学習できたと思われる。

学生の意見としては、「話したい内容を韓国語で考えて話せるのが楽しい」、「少人数で話しやすい」、「韓国語の授業はとっていないけど、ランゲージラウンジで会話ができ嬉しい」という意見があった。先生よりは「最初は発言する人が少なかったが、雰囲気に馴染んでからは、1年通して参加する学生もいるなど積極的に参加するようになった」ということが伝えられた。

総括してランゲージラウンジを実施することにより、学習者の話す能力の向上、韓国語学習のモチベーションをあげることができたと思われる。

2.6 フランス語部門：塩谷祐人

2021年度ランゲージラウンジ（フランス語部門）Pause Caféは、昨年度に引き続き、勝山絵深氏（本学非常勤講師）が行った。昨年度は週に2回の開催としていたが、今年度は毎週月曜日にオンデマンドによるコンテンツを配信とした。

登録者数は80名と多く、一定以上の需要があり、それに応えた活動になっている。ただし、後期は昼休みが40分しかないことに加えて授業形態が対面／オンラインに切り替わったこともあってか、視聴人数は減少した。後期も引き続き学生が継続して参加できるように工夫することが、今後の課題として挙げられる。

学科を越えてフランス語を学ぶ学生たちが集まり、フランス語の疑問を解決したり、実践的なフランス語を習い覚えたりするだけでなく、フランスの情報が得られるカフェのような場所を設けるために立ち上げたが、今年度も常時10名以上の学生が視聴し、コメントを毎回のよう寄せられる学生もあり、またコメントを共有することで学生間の刺激にもなっているようで、目的に適ったラウンジの運営ができていると考えている。

コンテンツに関しては、授業の補佐的なコンテンツとして位置づけた文法的な内容のものよりも、フランス語の勉強方法（フランス語検定関連を含む）や発音、フランスの文化を扱ったコラムの時のほうが学生からの反応が良いように思われた。これはオンラインにしたことで、通学時間や空き時間を利用してコンテンツを活用している学生がいることも無関係ではないであろう。こうした状況も踏まえて、今後は語学と文化コラムのバランスを再調整しつつ、継続していくことが肝要であると考えられる。

またZoomを利用した交流会も行っているが、人数が多いことと昼休みの時間が短いこともあり運営が容易ではない。これは今後もオンラインで継続するのであれば、改善すべき課題となっている。

04

語学検定講座報告



2021年度語学検定講座報告

中国語部門：洪潔清

2021年度の「中国語資格試験対策講座」は昨年度の秋学期に続き、オンライン形式で実施した。以下は担当教員が提供した情報に基づいてまとめた実施報告である。

1. 実施方法について

三つの講座はいずれもmanabaとZoomを併用して実施された。実施例としては以下の方法が挙げられる。manabaでは主に筆記問題を扱った。コンテンツに文法の要点を掲載し、小テストにはその文法項目の知識が問われた過去問をドリル形式にまとめ、参加者が毎回一つの文法事項を確実に習得することを目指した。manabaの筆記問題のドリルに取り組む参加者が減少傾向になった場合は、Zoom授業の中でも筆記問題を解かせる時間を設け、参加者の学習を促した。

また、いずれの講座においても受講者の苦手な分野はリスニングと見られるため、Zoom授業中は過去問の練習を通してリスニング強化に力を注いだ。例えば、その回の問題文が全く聞き取れないことを避けるために、また語彙力のアップを図るために、予め問題文のキーワードリストをQuizletというツールを利用して配布した。そのうえでZoomの中でリスニングの過去問を解かせる。その際はスクリプトなしとありの二つのパターンを準備し、両方やらせることで音声を聞く機会を増やすとともに、スクリプトなしでは聞き取れない語句を認識させる効果を狙った。解答後は問題文を参加者に簡単に訳させることで理解の不十分なところを把握し、重点的に解説を行った。

2. 受講者について

受講者数は多くないが、出席者は最初から最後まで大変真面目に勉強していた。少人数授業で、練習機会が多かったため、いろいろな表現を聞き取れるようになっただけでなく、上手に話せるようになり、一定の日常会話ができる能力を習得したと見られる。

また今年度も一年生の参加者がいた。一部は途中で自身の学力の不足を理由に受講辞退を申し出てきたが、最後まで努力して受講を続けた一年生もいた。

3. 今後の課題について

昨年度に続き、今年度も中検とHSKでクラスを分けることが望ましいとの意見が寄せられている。とりわけ、二つの試験のリスニング形式や出題される語彙が異なるため、4回ずつ扱えば、十分な時間がとれず、学習指導が不十分であることが指摘された。

また、Zoomというリアルタイムの授業方式は対面授業とほぼ同様な効果が得られたことから、今後正規授業が対面式に戻っても、資格対策講座が現在のmanabaとZoomの併用方式で実施することが可能ではないかという現場からの声が上がっている。従来の参加者数からもオンライン

形式のほうが多い。さらに、オンライン形式の場合は、参加者がmanabaによる配信型にするか、Zoomによるリアルタイム授業にするか、または両方に参加するか、自由に選択できることから、より多くの学生に参加してもらうことには今後の課題として検討すべき提案ではないかと思われる。

ドイツ語部門：コンスタンティネスク チェザル

2021年度のドイツ語検定試験対策講座は、春学期の水曜5限に3級対策講座（白金）、秋学期の同じく水曜5限に4級対策講座（横浜）を、いずれも佐藤修司氏（本学非常勤講師）の担当で、オンラインにより開催した（それぞれ全8回）。

両講座ともZoomを使用してのリアルタイム型の授業を実施したが、参加することのできない学生もいたため、教材資料をmanabaにアップロードし、適宜学生が自修した上で、質問等がある場合は同じくmanabaを通して受け付け、回答するオンデマンド式（教材提示型）の授業も併用した。

3級対策講座は、過去の出題内容を踏まえた文法等の解説用教材を用意し、学生にはそれを参照した上で過去に出題された問題に解き方のヒントをつけてアップロードしたものを解かせ、授業中に答え合わせを行った。第1回～第5回授業時には文法問題を、第6回～第8回授業時には長文問題と聞き取り問題とを扱った。また、語彙力の向上を図って単語集を紹介したほか、授業時間内に扱うことのできなかった問題に関しては、解き方と解答をつけたプリントを作成、配布した。ちなみに、リアルタイム型、ならびに教材提示型の授業に参加した学生数は2名であった。

4級対策講座も、3級対策講座と同じように、文法等の解説用教材と解き方のヒントをつけた過去に出題された問題を用意し、授業時に答え合わせを行った。文法問題に関しては第1回～第7回授業を充て、第6回授業以降は、加えて長文問題と聞き取り問題も扱った。また、授業時間内に扱うことのできなかった問題に関しては、解き方と解答をつけたプリントを作成、配布した。ちなみに、リアルタイム型の授業に参加した学生数は3～2名、教材提示型のそのみに最後まで参加した学生数は他に2名であった。

なお、両クラスとも学習の進捗度を確認するために、毎授業時に短い課題を提出させた（ただし、提出は任意とした）。

スペイン語部門：大森洋子

スペイン語DELE準備講座は、今年度は、講師の先生との連絡をとりながら、Zoomとmanabaを使って行った。さらに、DELEと目的を同じながら、パソコン受験が可能で、年間の受験チャンスが多いSIELEの準備にも適する講座として開講している。

1. 募集に際して

オンライン講座となったため、まず学習歴があることを条件に募集を行った。教室での講座の場合には、学生の学習状況を細かく観察できるために、意欲のある学生については学習を始めたばかりの学生も対象にしたが、今回は、1年以上の学習歴をもつ学習者に限った。応募者は、具体的に11月、または次年度の5月のDELEの試験を受けようという意欲的な学習者が多く、DELE試験についての知名度が上がってきたことを実感した。しかしながら、やはり、オンラインでの広報の仕方に限界があるのか、申込者数の減少が見られた。

夏休みのコースでは、5日のコースであり、レベルが自分の目的や学習レベルにあっていない学生もいて、最後は2、3人の出席になってしまった日もあったが、それでも目的をもった学生が熱心に授業に臨んでいたという報告を受けている。

秋学期についても、オンラインで講座を行ったため、普段は横浜開講のために白金で授業を受けている学生の受講が難しかったが、今回はその問題が解消した。さらに、水曜日でいろいろなイベントもある中で、11月のDELE試験まで、講座をうまく活用した学生も見受けられた。

2. 講座内容について

昨年の問題点として指摘した教材の配布等であった。Manabaを利用して行っていたが、Manabaに載せる教材が不鮮明で学習しにくいなどの問題が解決されつつあると言える。

今回は、講師もZoomによるオンライン授業にも慣れたことで、スムーズに講座は進められたようである。

3. 総括

受講者は少なかったようであるが、学習者のスペイン語を学ぶモチベーションの一つとしてDELE試験受験、またSIELE受験などの可能性を学生に知らせていくことで、自律学習の姿勢が身についていくのではと期待しているところである。それが、外国語教育、スペイン語教育のレベルアップにつながっていくだろうと考えている。

本講座の実施にあたっては、LMSでのコース設定、アカウント作成など教養教育センタースタッフ、教務部スタッフ、情報センタースタッフにさまざまな協力をいただいた。改めて謝意を表したい。

韓国語部門：李善姬

2021年度韓国語の語学検定講座は、オンライン同時双方向型(Zoom)の形態で実施された。担当講師、実施期間、参加人数などは次のとおりである。

クラス	担当講師	実施曜日・時限	実施期間	参加人数
TOPIK I -1級	秋賢淑	月曜日4時限	5月10日～ 6月28日 9月27日～11月29日	3～8人 1～4人
TOPIK I -2級	金南听	木曜日5時限	5月13日～ 7月1日 9月30日～11月25日	3～10人 1～5人
TOPIK II	崔静仁	月曜日4時限	5月10日～ 6月28日 9月27日～11月29日	2～8人 2～13人

●学習内容

TOPIK I -1級クラス、TOPIK I -2級クラス、TOPIK IIクラス共に、過去問の「読解」「聞き取り」の問題を解きながら、質問に回答した。授業以外の時間の質問については、manabaを利用し、学生の質問に回答した。毎回テストを行うことで、学習到達度の確認を行った。TOPIK IIクラスはmanabaの個別指導を使用し、「作文」の添削指導を行った。また、TOPIK-1級クラスは、当該時間に参加が難しい学生のために、第5回～第8回の講座をオンデマンドでも実施した。

●学生の反応と成果

学生からは、「自分一人で勉強するのに限界を感じたが、対策クラスがあって、積極的に臨むことができた」という意見があり、講座担当の先生からは、「最初はレベルの差が大きく、難しく感じる学生もいたが、講座に続けて参加することにより後半は学生の学習上達が見れた」ということが伝えられた。

春学期に比べ、秋学期は参加人数が少し減少したが、全体的にオンラインで講座が実施されたことで、対面で実施した時より多くの学生が意欲的に参加できたと思われる。

フランス語部門：塩谷祐人

■仏検3級対策講座

昨年度は新型コロナウイルスの影響により秋学期のみの開講であったが、2021年度は春学期と秋学期の両学期で開催することができ、昨年度に引き続き、本学非常勤講師の檜垣嗣子氏が担当した。

オンラインによる開講で春学期は8名、秋学期も同じく8名がエントリし、回が進むにつれて出席者が減少したものの、それでも春学期は半数以上が最後まで継続的に出席し、秋学期に関しては試験直前の回まで7名が参加していた。

事前にmanabaを通じて過去問題を配布し解いてもらい、Zoomでその解説を行うという形式は、

実践的な力を伸ばすための有効な手段であったと考えている。実際に秋学期に受講したさまざまな学科の学生からは、それぞれ4級から準2級の検定試験に合格したとの報告もなされている。

また白金／横浜キャンパスの制限がなく受講しやすいことを考えても、manabaとZoomを併用したやり方は、今後対面授業が中心となったとしても継続して行う可能性を検討したい。一方で、90分のオンライン講座では解説に多くの時間を費やすことになってしまったため、事前の説明を詳しくしたり、3級の難易度に躊躇してしまう学生へのサポートを行ったりする必要があるという課題もみえてきた。

■仏検4級対策講座

昨年度までは3級対策講座のみの開講であったが、2021年度から新たに4級の受験者を対象にした講座を開講し、本学非常勤講師の加藤美季子氏が担当した。春学期は14名、秋学期は8名のエントリがあった。しかしオンラインでの開催という気軽さのためか、回が進むにつれて参加者が減少したため、今後の改善策を考えたい。

とはいえ、秋学期中に1回だけ参加者が0名の回があったものの、常に参加する学生がいることを考慮すれば、とりわけ初習外国語としてフランス語を学習する学生のためには、今後も継続して開講し、様子を見るべきであると考えている。また秋学期に参加者が0名になったのは、大学の授業形態が切り替わる時期であり、学生の学習環境によって生じる負担を踏まえた対応も考える必要があると思われる。

今回はmanabaを通じて過去問題を事前に配布し、Zoomによる双方向の講座で解説などを行った。その方式は受講場所の制限が少ないなどのメリットがあり、また学習効果も高い。対面授業が可能となった後も、対面形式の利点と比較しつつ、オンライン形式も選択肢の一つとして残しておくべきであろう。

日本語部門：徳間晴美

2021年度に、日本語関連講座として「JLPT（日本語能力試験）講座」および「日本語教育入門講座」を新たに開講することができた。以下、それぞれについて報告する。

■JLPT（日本語能力試験）講座

春学期はN1レベルとN2レベル、秋学期はN1レベルのみを開講し、それぞれ7月と12月の試験日前に実施した（全8回）。講座はmanaba（LMS）を利用して学生への連絡や資料配布を行い、授業はZoomでの同時双方向型で進められた。受講生は、JLPTの受験予定者や日本語能力向上を目的とした留学生などがおり、いずれの講座も10名以内で、個別の質問にも応じやすく、積極的に参加する学生の様子が見られた。

講座の内容については、留学生のニーズを把握しつつ、苦手とされる語彙や文法を取り上げ、学生の理解度や習得度に応じた解説を行うなどした。いずれの講座の担当者からも、大学入学後の留学生にとって、意義のある講座であったとの報告がなされた。

私費外国人留学生枠で入学する留学生の場合、大半はJLPTのN1レベルに合格しているが、入学後にN1合格を目指す留学生もいるため、多忙な大学生活を送る中で、掲げた目標を諦めないようJLPT講座を有効に活用してもらいたい。また、本学には、正規留学生以外にも、日本語学習を必要とする多様な背景を持つ学生が各学部 zu 相当数いるため、今後、広報を十分に行い、それらの学生にもJLPT講座の受講を勧めたいと考える。

■日本語教育入門講座

本学では、明治学院共通科目として多文化共生関連科目が開講されており、授業担当者からも、日本人学生の中に日本語教育という分野に関心を持つ学生がいるという話を耳にしていた。一定のニーズがあることが見込まれていたこともあり、2021年度に日本語教育学の入門が学べる講座として新設し、募集を行った。受講生は10名から15名で、留学生もわずかではあるが含まれていた。

授業は、上記のJLPT講座同様の方法で実施した。入門ということもあり、受講生同士で考え、話し合う時間が多く取られ、普段とは異なる視点で日本語や日本語学習を捉えることが重視された。受講生からは、普段無意識に使っている日本語の難しさに気づいたといった意見や、日本語学習の難しさに更なる興味を持つようになったという声が聞かれた。様々な理由で日本語教育に関心を持つ学生がいることもわかり、在学中や卒業後にも役立つ学びがこの講座で提供できていると考える。

日本語教育関連の試験としては「日本語教育能力検定試験」（年1回・10月実施）があるが、今年度の様子からは、まずは入門講座として日本語教育に関心を持つ学生に、日本語を教えるとはどういうことであり、社会の中ではどのような位置づけや重要性がある分野なのか等について考える講座として継続できれば幸いである。

05

研究プロジェクト

05

ひとびとの歴史を表現する： 首都圏開発と市民活動の現代史的探究

プロジェクトメンバー：猪瀬浩平、植木 献、長谷部美佳、荻村哲郎、可部州彦

本研究プロジェクトは、戦後の日本において市民活動・運動が如何に展開されてきたのか、首都圏近郊を主たる対象に探求するものである。特に、障害のある人や外国にルーツを持つ人と共に生きることを目指して行われてきた活動に焦点をあて、首都圏の開発との関係に留意しながら、市民活動・運動が如何に実践されてきたのか、言説と日常実践の双方の調査・分析を通じて明らかにすることを旨として研究を行ってきた。

新型コロナウイルスの感染拡大によって、昨年度予定していた調査が予定通り遂行できなかったことにより、本年度まで研究期間を延長した。

本年度は、埼玉県越谷市・春日部市を中心に活動している、障害者運動団体わらじの会について、特に設立当初の資料（テキスト、写真等）のデジタルアーカイブ化を行うとともに、現在の活動記録の作成を行った。

わらじの会は、東武伊勢崎線沿線の人口急増期に生まれた障害者団体であり、都市と農村の文化がまじりあいながら、障害のある人の地域生活運動を育んでいたこと、およびそのことを関係者自身が意識化しながら運動を展開した点に特徴がある¹⁾。現在、本研究プロジェクトも協力する形で、わらじの会を始めとする埼玉の障害者運動が生み出した思想を、水俣病や有機農業運動など戦後の日本の社会運動とも関連づけながら考察するブックレットの編集が進んでおり、2022年に生活書院からの刊行を予定している。

また、新型コロナウイルス感染症の発生状況を注視しながら、首都圏における多文化共生をめぐる活動の記録作成や、資料の収集を進めていく。焦点は神奈川県横浜市と大和市にまたがるいちょう団地を中心にした地域である。特に、いちょう団地は入居開始から今年度が50周年にあたり、その歴史を振り返る中で、外国籍住民の流入を「いちょう団地史」的に振り返ることを通して、郊外集合住宅における「多文化共生」のあり方を考察していく。

以下は、本研究プロジェクトにかかわる昨年度、本年度の研究業績である。

猪瀬浩平2020「「公有地」を耕す」『すまいろん』108：38-41

猪瀬浩平2021「誰もが共に生きる埼玉県を目指して」『人権と生活』52：19-23

文献

1) 猪瀬浩平2019『分解者たち——見沼田んぼのほとりを生きる』生活書院

林京子と上海

——共生／加害の記憶——

プロジェクトメンバー：篠崎美生子、渡辺祐子、洪潔清

本プロジェクトの目的は、林京子のテキストのうち上海を舞台としたものを、現地での実地調査を手がかりに分析し、共生／加害の記憶がどのように織り交ぜられているかを明らかにすることにあつた。1931年生まれのエは、父の赴任地である上海で1歳から14歳までを過ごしたのち、1945年の帰国直後に長崎で被爆しているが、被爆とその後の人生にかかわる小説の陰惨さに比べ、上海を舞台としたものの多くは幸福感に満ちている。

ただし、上海での少女時代を中国人との幸福な「共生」として語ることは、侵略者としての上海滞在、すなわち「加害」を隠蔽することにもなりかねない。林は『上海／ミッシェルの口紅』（講談社文芸文庫、2001）のあとがきで、それらの短編集が「ありのままに子供の目で」書かれたものであるとうたってはいるが、上海を舞台とした林の小説を、作家の記憶、または事実として承認するのではなく、あくまで戦略的な表象と仮定し、その内実を分析することが必要であるとの考えから、我々は研究をスタートさせた。

はじめは、林京子研究で知られるフェリス女学院大学の島村輝氏が主宰する読書会に参加し、資料とつぎ合わせながら『ミッシェルの口紅』（1980）を再読する中で、「ありのまま」とは言えない事象をいくつか小説の中に発見することができた。ただし、それを上海における現地調査で確認する計画を立てているさなかに、コロナ禍により海外出張が難しくなってしまった。

そこで代わりに行ったのが、オンライン講演会（2021.3.1 科研費研究プロジェクト「1910～1930年代の文化メディアにおける日中相互表象の形成と展開」（18K00297 代表者：篠崎）との共催）である。島村輝氏の講演「上海をめぐる三つの透視図―「著述業」者・林京子の移動視点―」は、上海を舞台にした小説集『ミッシェルの口紅』『上海』（1983）及び長編『予定時間』（1998）を通じ、林がいかにして小説の中に事実らしさを構築していったかを明らかにするとともに、「私小説」として以外の解釈可能性をひらいてみせるものであつた。コメンテーターの秦剛氏（北京外国語大学）はこれを受け、とくに『予定時間』を「スパイ小説」として読む可能性を強調、映画のカメラワークとの関連も示唆した。また、『予定時間』に、当時は日中両国でまだ十分に注目されていなかった芥川龍之介『支那遊記』（1925）が批評的に織り込まれていることを評価した。

この講演会には、中国、アメリカ、日本から計75名が参加し、その後の討論も非常に有意義なものとなったため、講演、コメント、討論に小論を加え、これも上記科研費プロジェクトとの共同で報告書を作成した。また、講演会に中国からの参加者が多かったこと、中国人研究者の林京子への関心が高いことを踏まえ、本学非常勤講師朱海燕氏の協力を得て報告書の中国語版も作成した。

なお、報告書の巻末に収めた「林京子」をつくった「芥川」と「魯迅」で述べたように、上海を舞台とした林の小説群には、事実らしさの構築ばかりでなく、「林京子」像の巧みなプロデュースを見ることがもきる。「芥川」を、たくましい近代中国に理解のない「文人」と断じ、それへの距離を語る一方、中華人民共和国で今日に至るまで「革命的」とも評価される「魯迅」との、生理的なまでの近さを強調する手法がそれである。

上海を舞台とした林の小説の中には、「加害」の記憶、もしくは中国人から「加害」者として目されていることを自覚する箇所も、ないわけではない。こうした箇所は、当時の中国人との「共生」の幸福を回想する小説の中で、ノイズとして読者に認識される。しかし、かつては「加害」者（の子供）であっても、「芥川」を否定し「魯迅」に寄り添う姿勢を示すことで、「林京子」は現代中国との和解の担い手になることができているのかもしれない。この件については、コロナ禍が去ったのち、別の機会に上海での調査を進め、より精密な立論を期したいと考えている。

このたびは、当初の予定に従って上海における現地調査を行うことができなかったが、旅費を報告書の作成に充てることをお許しいただいたおかげで、日中両国語の報告書を完成させることができた。付属研究所の皆様には、改めて御礼申し上げたい。

Extensive Reading vs. Audio-Assisted Extensive Reading: A Comparison of Performance and Motivation

Dax Thomas

Extensive Reading is gradually becoming an integral part of many university EFL curriculums across Japan. With the introduction of large online graded reader libraries and robust learning management systems, it is becoming easier and easier for students to gain access to extensive reading materials with audio support features. This study aims to explore the degree to which reading with audio support – Audio-assisted Extensive Reading (AR) – can affect student performance and motivation.

At the beginning of the 2021 academic year, 109 students were given a one-year license granting them access to the online graded reader library *Xreading.com*. In the first half of this study, students were asked to read a set number of graded readers over the course of the Spring semester, with the audio feature of Xreading turned on. They were then asked to complete a bilingual survey asking them to share their impressions on using this audio feature. Of the 109 students doing Xreading, 80 students participated in the survey. In the Fall semester, students were asked to continue reading graded readers on Xreading.com, this time with the audio support feature turned off. The Fall semester survey has yet to be conducted at the time of this writing.

Some of the preliminary quantitative results from the Spring survey are shown in figures 1 and 2 below. Figure 1 shows the scaled responses to the question, “How effective do you think listening to the audio track while reading was in helping with the following items?”. Ten language-learning-related items were listed. Figure 2 shows the scaled responses to the statement, “Reading along while listening to someone’s voice...”. Seven motivation-related items were listed.

With regard to AR’s effects on performance (Figure 1), students seemed to feel that it was most effective in helping with “reading smoothly” (item b), “learning the pronunciation of a new word” (item e), and “remembering the pronunciation of a new word” (item f). These results make good sense given that fluency and pronunciation are most often associated with the oral/aural aspect of language. While most other items in the performance section of the survey bridged the “effective” and “somewhat effective” categories, it is interesting to note that many students seemed to feel that AR was “not very effective” or only “somewhat effective” in helping with “understanding new grammar points” (item g) or “remembering new grammar points” (item h). Again, this would seem to make good sense given a general

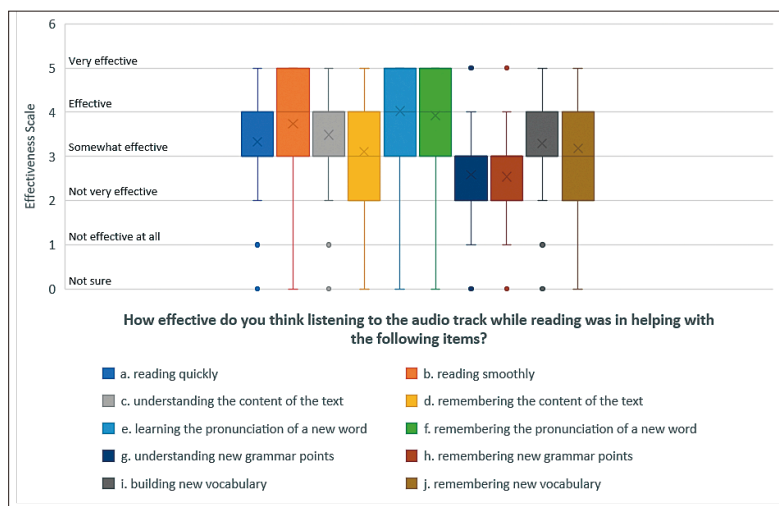


Figure 1 : Effects on Performance

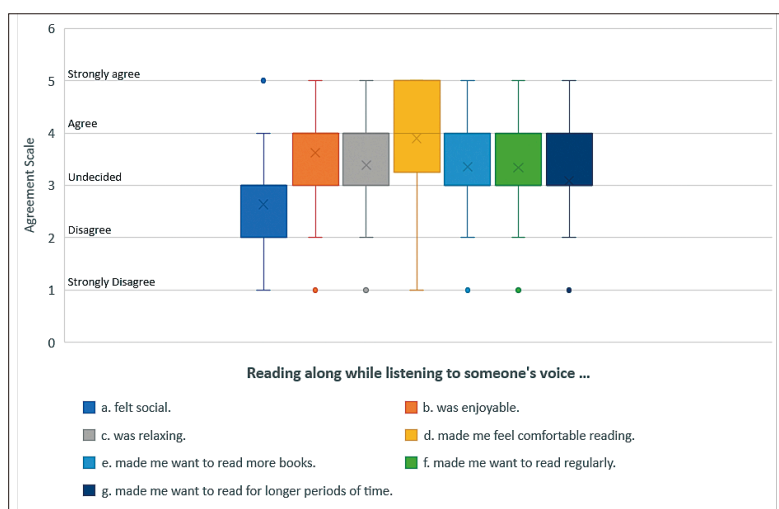


Figure 2 : Effects on Motivation

tendency for students to associate the learning of grammar points with study approaches that favour a more “intensive” kind of reading, and are perhaps less focused on oral/aural aspects.

The preliminary results from the motivation section of the survey (Figure 2) also provide some interesting indications. Perhaps most surprising is the low agreement scores for “felt

social" (item a), which bridged the "undecided" and "disagree" categories. It might be expected that the more active nature of AR, especially in times of remote learning, could help students feel somewhat less solitary in their studies. However, this doesn't seem to be the case here. Also of note is the generally high agreement with "made me feel comfortable reading" (item d). It is unclear at this stage what specifically about AR is making students feel comfortable, however some comments in the qualitative section of the survey seem to indicate that listening while reading is "fun" and "helps us understand more easily". Finally, agreement for many of the motivation-related items tends towards the "undecided" level. It is perhaps possible that students' views will become clearer on this after completing the second survey in which they will compare a more typical Extensive Reading experience against what they did in the Spring semester with Audio-assisted Extensive Reading.

Overall, the preliminary results seem to indicate that Audio-assisted Extensive Reading may have a generally positive effect on students' performance in certain language-related areas. Comparison with the results of the Fall survey should help shed more light on the motivational aspects of AR.

06

研 究 業 績

06

池田 昭光

【学会発表】

「信頼を不信から考える——マシュー・キャリー著『民族誌的理論としての不信』を手がかりに」
科学研究費学術変革領域研究（A）「イスラームのコネクティビティにみる信頼構築」ワークショップ、オンライン開催（2021年7月31日）

塩谷 祐人

【論文】

「アンドレイ・マキーヌのアカデミー・フランセーズ講演を巡って—外国出身のフランス作家に関する考察」
明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュラル』第16巻（2022年3月掲載予定）

【その他（翻訳）】

ミシェル・ビュトール『レペルトワールII』（石橋正孝監訳、幻戯書房、2021年12月）
担当箇所：「貧しき縁者」（p.203-209）

黒川 貞生

【論文】

Muscle stiffness of the rectus femoris and vastus lateralis in children with Osgood-Schlatter disease.
Shota Enomoto, Toshiaki Oda, Norihide Sugisaki, Misaki Toeda, Sadao Kurokawa, Masaru Kaga. The Knee 32, 140-147（2021）

大学生における体型、体力の変化と運動習慣ならびに性別に関する縦断的研究

土屋 陽祐, 黒川 貞生, 亀ヶ谷 純一, 森田 恭光, 榎本 翔太, 諏訪間 恵美, 中谷 深友紀, 杉崎 範英.

明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュラル』第16巻（2022年3月掲載予定）

篠崎 美生子

【論文】

「『帝国』の語りとしての『山月記』」（早稲田大学国文学会『国文学研究』第百九十四集 2021年6月）

「『林京子』をつくった『芥川』と『魯迅』一蹴に代えて」（『林京子と上海』研究会／中国表象研究会編『上海を舞台に—林京子／芥川龍之介—』2022年2月刊行予定）

【書評】

「柴田優呼『プロデュースされた〈被爆者〉たち——表象空間におけるヒロシマ・ナガサキ』（明治学院大学国際平和研究所編『PRIME』45号 2022年3月刊行予定）

徐 正敏

【著書】

『東京からの通信』（単著）、かんよう出版、2021年、全体352頁

『アジアキリスト教の歴史』（韓国語、共著）、図書出版デザンカン、2021年、51-59頁（全体239頁）

『メタバース時代の神学と牧会—延世神学文庫011』（韓国語、共著）、トンヨン出版社、2021年、50-57頁（全体214頁）

【論文】

「書評、日韓キリスト教関係史資料3、1945-2010」（韓国語）、『基督教思想』第747号、219-223頁 2021年3月

「書評、日韓キリスト教関係史資料3」『本のひろば』第759号、20-21頁 2021年3月

「書評、『東洋文化』（東京大学東洋文化研究所）101号、社会参与画家の富山妙子特集」（韓国語）、『基督教思想』第753号、201-206頁 2021年9月

「日本キリスト教の受容史に対する断想―「キリスト教主義」の形成と「国学」」（韓国語）、
『柳東植教授上寿記念文集風流神学百年』（ドンヨン出版社、2021年）、121-135頁

【学会発表】

「日本の国学とキリスト教主義」（韓国語）アジアキリスト教史学会（アジアキリスト教史学会創立
10周年記念学術大会、韓国、安養大学）2021年11月13日（オンラインZoomで発表）

徳間 晴美

【論文】

「待遇コミュニケーションの観点を意識したビジネス日本語科目に関する考察―場面認識と自己内
省を中心に―」『日本語教育研究』第55輯, 21-34 韓国日語教育学会 2021年5月

【学会発表】

運営委員会企画「待遇コミュニケーションにおける理論的枠組みを考える」

待遇コミュニケーション学会2021年秋季大会（オンライン開催）（2021年10月23日）

共同発表者：アドゥアヨム・アヘゴ希佳子、李ジウォン、任ジェヒ、蒲谷宏

野副 朋子

【調査・研究報告】

野副 朋子、安部 淳「植物バイオテクノロジーに関する実験実習」

明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュラル』第16巻（2022年3月掲載予定）

福山 勝也

【論文】

「カルボジイミド基を有するポリマーから調製したガラス状炭素に対する熱処理とHIP処理の効果」

明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュラル』第16巻（2022年3月掲載予定）

山内 薫

【著書】

『「ことば」の学びに寄り添う日本語教育―「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化をめざして―』くろしお出版、2022年2月刊行予定

【論文】

「大学時代及び大学という学習環境で日本語を学ぶ意義―フランスの大学における継承日本語学習者を事例に―」『第6回スペイン日本語教師会シンポジウム発表論文集「未来を創る複言語・複文化教育」』、pp.55-60、2021年12月

「「ことば」の学びを探究する視点としての移動性―グローバル時代における生涯学習としての外国語教育を実現するための一提言―」『日本語・日本語教育』第4号、pp.111-129、2021年3月

【学会発表】

「生活から人生へと視野の広がりを目指す言語教育実践―学部生1年次対象の「口頭表現トレーニング」科目を事例として―」日本生涯教育学会第42回大会研究発表、オンライン、(2021年11月28日)

「大学時代及び大学という学習環境で日本語を学ぶ意義―フランスの大学における継承日本語学習者を事例に―」スペイン日本語教師会第6回シンポジウム「未来を創る複言語・複文化教育」、オンライン、(2021年6月20日)

Dax Thomas

【学会発表】

Japanese university students' attitudes towards extensive reading in the digital age. Extensive Reading Around the World 2021. Elam, J., Thomas, D., Grimes-MacLellan, D., & Galichet-Honda, V. (Online). August 13, 2021.

ELAM Jesse

【学会発表】

Japanese university students' attitudes towards extensive reading in the digital age. Extensive Reading Around the World 2021. Elam, J., Thomas, D., Grimes-MacLellan, D., & Galichet-Honda, V. (Online). August 13, 2021.

Grimes-MacLellan, Dawn

【学会発表】

Japanese university students' attitudes towards extensive reading in the digital age. Extensive Reading Around the World 2021. Elam, J., Thomas, D., Grimes-MacLellan, D., & Galichet-Honda, V. (Online). August 13, 2021.

Cultivating an Immersive Environment in the Classroom: Teaching Japanese Society through Koreeda Films. Japan Studies Association (Honolulu, HI, USA – Virtual). January 7, 2022.

◆上記のほか、所員の業績を、下記URLにて報告しております。

<https://gyoseki.meijigakuin.ac.jp/mguhp/KgApp?courc=270000>



2022年3月31日 発行

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報 SYNTHESIS 2021

編集代表	嶋田 彩司
発行者	嶋田 彩司
挿画	土方 淳代
発行	明治学院大学 教養教育センター付属研究所 〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町1518 電話 045-863-2067
制作	相和印刷株式会社

Printed in Japan

